

汎用性のある中学校地域学習カリキュラムの開発 —東広島市立志和中学校における取り組みから—

熊原 康博・岩佐 佳哉*・横川 知司**・原田 歩***・三宅 将己****
・毛利 奈美子****・山垣内 智彦*****・沖 慧美*****

(2021年12月6日受理)

Development of a Generalized Curriculum of Field Research for Junior High School
: A Case Study of Shiwa Junior High School in Higashi-Hiroshima City

Yasuhiro Kumahara, Yoshiya Iwasa, Satoshi Yokogawa, Ayumu Harada,
Masami Miyake, Namiko Mouri, Tomohiko Yamagouchi and Emi Oki

Abstract: The purpose of this study was to develop a generalized field research curriculum for junior high schools through the practice in the 2020 curriculum “the Period of Integrated Study” at Shiwa Junior High School in Higashi-Hiroshima City. The curriculum had a total of 23 hours for third-grade students, and was divided into the following 7 parts: 1) map work to learn about the geography and history in the area around the school, 2) fieldwork for all students to find research targets in the area, 3) desk work to choose the target each group and think about what and how to research, 4) group fieldwork to clarify the question of the target, 5) desk work to analyze and summarize the results, 6) presentation, and 7) reflection. In many cases, we received advice from local people who were familiar with local history. In order to conduct a field research, we thought it is important for effective implementation of the field research to 1) choose the area around the school as the target area, 2) use old and new maps to understand historical changes in the area, and 3) have the local people actively support the project. The study confirmed the significance of the curriculum in terms of student growth and enhanced interaction between community and school.

Key words : junior high school, Higashi-Hiroshima City, community, field research

はじめに

学校における、身近な地域を対象とした地域調査は、地理教育分野を中心に数多くの実践や理論的な検討が行われてきた(篠原, 2001; 池, 2012; 吉田, 2018 など)。池(2012)は、地域調査の意義を、学習意欲を高め学習課題をもたせやすいこと、地域的特色をつかむ方法を修得しやすいこと、子どもの貧弱化した原体験を補完できることなどと指摘した。中学校においては、地域調査は社会科地理的分野で扱うが、時間の確保が困難であること(宮本, 2009)や、高校入試での出題がされ

にくいこと(池, 2012)の理由から十分に行われていない。一方、中学校の「総合的な学習の時間」で地域調査を行うことは、上記の問題を克服できる上、この科目の目標の一つである「実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする」(文部科学省, 2017)に合致する。実際に、日本各地の中学校で「総合的な学習の時間」に地域調査が行われてきた¹⁾。井田(2002)は、地理教育の手法・視点が「総合的な学習の時間」を支え、「総合的な学習の時間」の

* 広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期・日本学術振興会特別研究員, ** 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期, *** 広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期, **** 東広島市立志和中学校, ***** 広島県立三次中学校

1) 例えば、長野県総合教育センターの「総合的な学習の時間」に関する情報(実践事例) <https://www.edu-ctr.pref.nagano.lg.jp/kjouhou/kyouka/data/sougou/2cyu.htm> (2021/11/6 閲覧)

活動が地理教育で不十分な態度・価値形成を促す相互補完の関係であることを指摘した。一方、地域調査を行う課題として、担当教員が、地域調査に習熟していないこと、あるいは、その地域を知らないことなどが想定される。

本稿では、2020年度に実施した東広島市立志和中学校における「総合的な学習の時間」で地域調査を行った取り組みを紹介する。この取り組みでは、地理学の大学教員と大学院生が支援をしているが、このような関わりがない場合でも、「総合的な学習の時間」で地域調査が可能となる汎用性のある方策を検討することが、もう一つの目的である。この論文の構成は、以下の通りである。まず、授業の進め方を述べ、学校教員が感じた本授業の成果と課題を示す。最後に中学校で地域学習カリキュラムを行う上での方策を提案する。

この研究の経緯は次の通りである。筆頭著者の教員及び共著者の大学院生3名は、東広島市旧西条町を対象とした地域調査に基づいて、地域の地理や歴史に関する『西条地歴ウォーク』（横川・熊原編著、2020）を刊行していた。共著者である三宅校長が、この書籍で実施した地域調査を生徒に取り組みせたいと発案したことによる。なお、2021年度も同様の方式で実施中である。

授業の進め方

1) 授業の概要

本授業は、東広島市立志和中学校の3年生（38名、1クラス）の「総合的な学習の時間」として実施し、期間は2020年9月中旬～12月初旬、時間数は23時間である（表1）。授業のテーマを「志和地歴ウォークをつくらう～ふるさと志和の暮らしの変化～」とし、学校周辺の地域の現状や歴史、地域が抱える問題などを、生徒自身の課題設定によって明らかにすることを意図した。授業の目標は「自分の地域の未来について、最新のデータをもとに考察し、提案する力を育てる」である。本授業を担当した教員は、本稿の共著者である3年生担当の教員の計3名であり、いずれも社会科の教員ではない。授業では、生徒を1班あたり4～5名の9つの班にわけて、多くの場合班ごとに作業を行った。また、中学校周辺の歴史に詳しい、志和在住の東広島郷土史研究会会員の吉本正就氏に、この授業全般にわたりアドバイスを頂いた。

2) カリキュラムの内容

授業は、【導入】として地域学習について社会科

表1 本授業のカリキュラム

時間数	授業日	学習の流れ	概要	ゲスト
1	9/10	導入	地域学習の進め方・意義、FWの利点・注意点の伝達。	
2・3	9/15	情報の獲得	新旧地形図を用いた学校周辺の土地利用変化の確認。	大学
4・5	9/24	課題の発見	地域の特徴や課題を発見するためのFW。	大学
6	9/25	課題の設定	各班でテーマを選定し、調査方法について検討。	
7・8	9/29	取材・伝達方法の獲得	新聞記者の講話による取材の方法や書き方の修得。	記者
9～11	11/2, 4, 6	課題の解決① （調査に向けた準備）	ネットや文献調査によるFWでの質問内容や調査項目の検討。取材先へのアポイントメント。	大学・地域の方
12～17	11/11, 12, 13	課題の解決② （聞き取り、現地調査）	地域の方への取材、現地調査の実施。調査がない日は内容の整理や分析の実施。	大学・地域の方
18・19	11/19	内容の整理・分析	班ごとの発表用レポートの作成。	
20・21	11/27	結果の提示	地域の方に向けた発表。	大学・地域の方
22・23	12/1	振り返り	生徒個々のレポートと感想の記述。	

FWはフィールドワークの略。著者作成。

教員や校長が説明すると共に、1, 2年生時に実施した地域調査について振り返りを行った。次に、【情報の獲得】として、学校周辺の新旧の地形図を用意し、各時代の土地利用を把握するために土地利用別の色塗りを行った（図1a）。色塗り作業のやり方や意義は配付資料（図2）に基づいて説明した。用いた地形図は、昭和4（1929）年【100年前】、昭和44（1969）年【50～60年前】（図3）、平成5（1993）年【20年前】、地理院地図【現在】の4枚であり、旧版地形図は国土地理院から購入した。1班約4名としていることから、班内で一人一時代の地図を担当することを意図した。各土地利用の色は予め統一している。地形図を各自塗りおえた後、①100年前と50～60年前、②50～60年前と20年前、③20年前と現在ごとに、どこでどのような変化が生じているのかを、班の中で意見を出し合った後、班ごとに発表してもらい、最終的に中学校周辺の100年間の土地利用の変化をまとめ、クラス全員でその変化を共有した。

この地域の土地利用の変化を以下に紹介する。学校周辺は、北に流れる関川へ注ぐ支流の小扇状地にあたる。100年前の土地利用は、扇央から扇端にかけての地域に針葉樹林（アカマツ）、扇端に近い地域に集落などが広がっていた。集落内には桑畑が点在していることから、養蚕と畑作が中心



図1 授業の様子

a: 情報の獲得(地図作業), b: 課題の発見(全体フィールドワーク), c: 課題の設定, d: 課題の解決②(班別フィールドワーク;池のゲート操作室), e: 課題の解決②(班別フィールドワーク;農家の人への聞き取り), f: 結果の提示(プレゼンテーション)

地形図から過去の暮らしを考えてみよう

1) 地形図からわかること

- ・国土地理院が作成。第二次世界大戦前は陸軍が作成していた。
- ・日本各地の土地利用が記録されている。
- ・色を変えることで、当時の土地利用が理解しやすくなる。
- ・時代の異なる過去の土地利用を比較することで、土地の変化を読み取ることができます。
- その地域の暮らしの姿を多岐にわたります

2) 地図記号を復習しよう(赤丸は今回の地形図ででてくる記号)

①	田	②	田
③	森林地(Forest)	④	森林地(Forest)
⑤	森林	⑥	その他の樹木帯
⑦	広葉樹林(Broadleaf)	⑧	針葉樹林(Conifer)
⑨	パイナップル地	⑩	地味
⑪	荒地(Barren)	⑫	サレシヤ樹林(Savanna)
⑬	荒地(Barren)	⑭	おれり

・地図記号は、地形図の年代によっても異なります。例(⑮)の地図記号は、1945(昭和20)年以降の地形図からつけられるようになりました。それまでは空白で記号でした。

→そのため、図の見直し方は地形図の発行時期によって変える必要があります。

・1945(昭和20)年の地形図の空色の地図記号には、「田」の下に旗印が入るもの(水田)と入らないもの(乾田)に分かれています。どちらも同じように置ってください。

・最新の地図記号は2013(平成25)年以降になります。

・地図中の高い丘陵や多角形は建物や駅を示します。

3) 塗り方のポイント

- ・どこまで塗ればよいのだろうか?
- 注(農地や森林)の中を流す(丸点線)が同じ土地利用の境界。
- ・建物や水田/畑などの境界の中には埋め込まれているものがある。
- ・自分の判断で塗りかきしれない(空の色を参照)。
- ・境界を少し塗って、中を塗りかきしれないに塗る。

4) どこがどのように変わったのだろうか?

- ・古い地形図と新しい地形図を比較して、どこで何が違うのかを境の中でとめてみよう。100年前/50年前、50年前/20年前、20年前/現在
- ・それぞれの比較で最も大きな土地利用の変化は何だろうか?また、それはどこで見られるだろうか?
- ・変化がないことも変化の一つ。
- 注: 国土地理院が作成する地形図、縮小などがかかっている場合があります。また、塗りかき作業も同様、細い線を塗ることがあります。

図2 地形図の土地利用別色塗り作業の配付資料(オリジナルはA4サイズ)

と考えられ、水田は見られない。50~60年前になると、扇状に水田や果樹園が広がるなど劇的に変化している。その要因は終戦直後に大規模な開拓が行われ、用水路が整備されたことによる。20年前になると水田が荒地や畑に変わっており、獣害や減反政策により転換したと見られる。一方、20年前と現在では大きな土地利用の変化が認められない。以上の変化を、フィールドワーク(以下、FW)の前に把握することで、過去の暮らしの痕跡を現地で認識しやすくなる。

2.1960年代(今から50~60年前)の志村中周辺の地形図

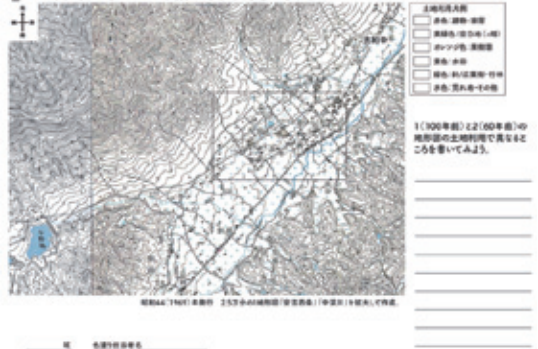


図3 土地利用別色塗り用の地形図(昭和40年代)の一例(オリジナルはA3サイズ)生徒は中学校周辺の四角内のみを塗る。

続いて、【課題の発見】として、全体FWを2時間にわたり実施した(図1b)。FWを行う前に、図4を用いてFWの目的や方法を説明した。このFWの目的は、①現在や過去の暮らしがわかるものを記録すること、②自分でさらに調べたい課題を見つけることであることを伝えた。またFWではワークシート(図5)を携帯する。このシートには土地利用別に色塗りをした新旧の地形図を載せており、歩くルート及び、曲がる箇所にアルファベットを付した。これにより、現地で説明する際に、生徒が現在地を地図上で把握しやすくなるからである。FWでは、ため池、神社、石碑、現在の土地利用や過去の暮らしの痕跡などについて簡単に説明した。なお、事前に大学側と学校側で下見を行い、ルートの確定や、ルート上が安全かどうか、どこで何を伝えるのかについて議論している。全体FWで歩いた距離は約2.6kmで、学校から出発し、学校に戻るルートであり、観察しながら歩くと約1時間半かかった。

その後、【課題の設定】として、全体FWを通して生徒各自で調べたい課題を班ごとに持ち寄って話し合いを行い、班ごとに一つずつ課題を決定した。テーマの決め方は、生徒の自主性を重視したが、内容が重複する場合は、少し異なるテーマに変更してもらった。決まったテーマをみると、農業関係(ため池・用水路、獣害、有機農業、酪農)、伝統的な家屋(家の間取り、赤瓦)、神社、廃校となった高等学校を対象としたものであり、この地域の景観や暮らしを特徴付けるテーマとなっている(表2)。

次に、班別FWの準備として新聞記者を招いて、取材の方法や、レポートのまとめ方を学んだ。

これらをふまえて、【課題の解決】を実施した。まず、各班で決めたテーマに沿って、何をどのように調べるのか、何を誰に質問するのかを検討した(図1c)。その際、どのようにまとめるのかについて、著者らが以前調査した、東広島市内の戦争遺跡を事例とした結果のまとめ方のプリント(図6)を作成して説明した。この時間で、取材先へのアポイントメントも生徒自身で取った。班別FWでは、各自のテーマに即して各種調査を行った。ほとんどの班で、テーマにふさわしい方に聞き取りを行った(図1d, e)。3日間設定しているのは、3人の教員が聞き取りに同行するため、FWを行う班の数を1日あたり3班に制限したことによる。調査のない日はデータの整理や分析を行っていた。これまでの成果をふまえて、【内容の

フィールドワークのやり方

1) フィールドワークを行う理由

- ・フィールドワークとは、実際に現地に行って、調査の目的にあわせて何かを観察し、証拠を集めることです。単なる散歩ではありません。
- ・今日の目的は、「**歴史的暮らしの変化を探る**」ことです。そのため、他の暮らしの跡やその変化の痕跡を探します。「暮らし」とは個人の生活だけでなく、工場や農業などの産業や、公民館・学校も含みます。
- ・同時に、次の授業で明らかにしていく「**問題**」も考えてください。

2) フィールドワークで何を観察するのか?

- ・地形図に描かれていないもの【例】工場の種類・名称、畑の作物、電気線など
- ・過去の暮らしの跡【例】使われていない橋の木、牛舎の跡、ため池の痕跡
- ・地域の土地利用とは違う現在の土地利用【例】太陽光発電

3) 観察記録の取り方

1. 現地を観察して記録したいものを発見します。
2. 観察した地点を地図に示します。地図に記号(①、②)とつけましょう。
3. メモ欄に、①と書いた後、観察したことや疑問に感じたことを書きましょう。

【例】①動物が入るの音や電気があった。どのような動物がくるのだろうか?

4. 観察した物の写真を撮ります。(メモの写真も同様取る)

②のメモで使う写真なのか後でわかりやすい)

→A2で写真メモを取ります。



4) 今後の調査に向けて

- ・班の中で観察記録を出し合って、班の中で関心が最も高いものや調べてみたい疑問を一つ選ぼう。
 - ・その疑問を解決する方法を考えてみよう。
 - ・疑問に答える方法が見つからなければ、疑問に関する情報を集めてみよう。
 - 【例】なぜ、ここに高橋があったのだろうかという問いに対して「いつからいつまで高橋があったのか? だれが学んでいたのか? 何を学んでいたのか? などについて整理してみよう。
 - 【例】どのような動物がくるのだろうか? という問いに対して「どこにどのような電気があるのか? 電気がどのような種類のものか? だれがいつから設置したのか? などについて整理してみよう。
- *BWITH(はつ、どこも、だが、なにも、なぜ、どのように)を観察すると、調べることが広がります。

図4 フィールドワークの配付資料(オリジナルはA4サイズ)

志和地歴ウォークふるさと志和の暮らしの変化〜フィールドワーク用ワークシート



図5 フィールドワークで携帯するワークシート(オリジナルはA4サイズ)

表2 各班のテーマと概要

班	タイトル	概要	地図	写真	図
1	田んぼの水がどこから来るか知っていますか？—小野池・小野池周辺の調査—	水の分配を理解するため、管理する方とともに、円筒分水や堰を巡り、聞き取りをした。	1	6	1
2	歴史あるお屋敷の面白い話	伝統的な家屋の歴史、間取りの特徴や、生活用品の用途を住人に聞き取りをした。	0	7	0
3	作物を賭けた人間と動物の戦い！（電気柵）	農地を囲む電気柵の設置状況や農家の方に獣害について聞き取りをした。	1	4	0
4	はなあふ〜彼のとりくみ〜	有機農業を行う農園の取り組みを、代表者に聞き取りをした。	0	5	1
5	志和神社についてどれくらい知っていますか？	志和神社の祭神や歴史について、管理の方に聞き取りをした。	1	5	0
6	西条農業高等学校志和分校とは？	「西条農業高等学校志和分校」の石碑から卒業生数の歴史的变化をとらえ、卒業生に聞き取りをした。	1	2	1
7	松島牧場の歴史に触れたおはなし	酪農をしていた方に聞き取りし、当時の様子や廃業に至る経緯を尋ねた。	1	2	0
8	教科書的赤瓦ポスター	新旧の空中写真から「赤瓦」分布の変化を示し、赤瓦にした経緯を聞き取りをした。	1	2	0
9	扇状地と志和町の農業	中学校周辺が扇状地であることを示し、典型的な扇状地である地域と比較した。	4	0	0

地図・写真・図はポスターで用いた点数を示し、地図には空中写真も含めた。イラストは除外した。著者作成。

地域調査のまとめ方

自分たちも知らない貴重な調査結果を互役に、わかりやすく伝える「まとめ方」を考えよう。

何を調査したのか一目でわかるタイトル
あるいは関心を引くようなタイトルが良いです。
副題をつける方法もあります。

調査した人の名前を書きましょう。

**身近な戦争遺跡を知っていますか？
—広島陸軍兵器補給廠八木松分廠の調査—**

〇〇組 長原康博・渡月知寿・森田成典・長塚 歩

見出しは大きい文字

目的
方法や使った資料の紹介
使った文献を明記すること
図を参照するところを書くこと
調べたことだけでなく想像も加えて書くこと

まとめでは、簡単な成果のまとめ、更に調査したいことを書くこと。

図に番号とタイトルをつける。使った資料を書く。

大まかと思う図は大まかしよう。

わかりやすくするため、写真の中に説明をいれてもよい。

「まとめ方」の構成は下記の図参照にすると、わかりやすいです。

- 1) 目的
- 2) 方法
- 3) 調査対象の紹介
- 4) 経緯
- 5) 考察
- 6) 成果のまとめ
- 7) 更に調査したい事
- 8) 参考にした文献
- 9) 電子メールやチャット
- 10) 参考ページ (URL)
- 11) お礼

良いまとめ方のヒント！

- ① 「まとめ方」の構成表を覚えてみよう
- ② 誰に何を書くのかを簡単にメモしよう
- ③ 調べたことをすべて載せる必要はありません。
- ④ 伝えたいことを選び、伝えたいことに必要な図表や写真だけを載せるようにしましょう。
- ⑤ どんな図表をつくり、どの写真を載せると、わかりやすく伝えられるだろうかを考えると、

※パワーポイントの 슬라이ドは、文字が少なめに、写真や図を大きく載せるとわかりやすいです。

図6 地域調査のまとめ方の配付資料 (オリジナルはA4サイズ)



図7 完成したポスターの例

整理・分析】として、プレゼンテーションソフトのPower Pointなどを用いて結果を整理した。全9班の内、7つの班で地図や空中写真を用いており、地図上で場所や位置関係・範囲をわかりやすく示す意図がみられる。

調査を始めてから2ヶ月後に、【結果の提示】として、プレゼンテーションを行った(図1f, 図7)。1班あたり10分の持ち時間で調査の結果を報告した。プレゼンテーションには同級生だけでなく地元の方も出席している。最後に、【振り返り】として、生徒個々に新聞に記事を投稿する形式で、これまでの活動をまとめ、振り返りを行った。

3) 授業の評価方法

この授業に対する生徒の評価の方法を簡単に述べる。先述した目標に照らして、表3の3つの観点で総合的に評価した。具体的な方法としては、3学年担当の教員が、①「地図作業」「フィールドワーク」「取材活動」などの活動の状況と、②提出されたワークシート(課題設定のプリントや地図の色塗り作業)、生徒が書いた新聞記事、冊子原稿などから評価した。

4) 外部との関わり

本授業では、大学の教員や大学院生、地域の歴史に詳しい地元の方、先述の新聞記者が外部の協力者として関わっている。大学は、授業に先立って学校側と授業の進め方の打ち合わせを行い、情報の獲得・課題の発見・課題の解決・結果の提示の各授業で参画している(表1)。質問があれば適宜答えるようにしていたが、問いかけを重視して、先入観を与えず、生徒自身で考えてもらうように心がけた。また、授業で使う資料(図2~6)を作成した。これらの資料は、基本的には毎年活用することができる。一方、地域の歴史に詳しい地元の方には、生徒からの問いに対する助言や、その問いに対して説明できる適した方の紹介をして頂いた。地元の方には、課題の解決・結果の提示の各授業で参画して頂いた。

5) 生徒の感想

カリキュラムの最後の授業で書いた生徒の新聞記事をまとめると、全員が調査の結果を簡潔に記述している。一方、半数に近い17人が調査の感想を、11人が今後の調査への意欲を、3人が郷土への愛着を、4人がこの授業が将来への生き方に資することをそれぞれ記述している。新聞記事を意

表3 カリキュラムの評価の観点

【観点1 知識及び技能】	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や地域の未来について現状から課題を見つけることができる。 ・課題解決に必要な情報を収集することができる。
【観点2 思考力、判断力、表現力等】	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの地域・職業や自己の将来に広く目を向け、活動の意図や目的を明確にして課題を見出し解決しようとしている。 ・目的に応じた手段を選択し、情報が収集できる。また、相手や目的に応じて内容をまとめ、分かりやすく表現している。 ・学習の仕方や進め方について振り返りながら、学習や生活に生かしている。
【観点3 学びに向かう力、人間性等】	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思で目標をもって課題の解決に向けた探究活動に取り組んでいる。 ・探究的な活動を通して、自分の生活及び地域とのかかわりを見直し、進んで実社会・実生活の問題の解決に取り組もうとしている。

著者作成。

識しているため、事実を中心に述べ、かつ文字数が限定されている中での文章表現であることを考慮する必要があるが、調査について適切にまとめ、調査の感想や調査の意欲をコンパクトに表現しているといえよう。

学校教員が感じた成果と課題

ここでは、この授業を担当した教員から示された成果と課題を紹介する。

1) 成果

- ・「地図などの資料やFWでの見聞から疑問点を整理し課題を設定する」という学習の道筋を学ぶことができた。
- ・FWや調べ学習を通して、志和中学校周辺の現状を把握することができた。
- ・課題解決に向けて、見通しを持って学習をすることができた。
- ・調べ学習などが計画的に進むよう、順序立てて準備することができた。
- ・学びを振り返り、ポスターや記事にまとめることができた。

2) 課題

- ・学んだことをこれからの生活にどのように活かしていくか、考える場面がなかった。
- ・班ごとの活動では、協力して取り組んでいた班とメンバーの役割が偏っていた班があった。テーマの設定の仕方を工夫して、1人1人が、より興味のあるテーマに取り組んでいけるようにしていく必要がある。
- ・今年度の学習を下級生に伝える場面を設定する

べきであった。

・「この学習をとおして身についた力」を振り返り、今後の研究（学習）の方向性について考える時間が持てなかった。

以上のように、これまで地域調査になじみのなかった教員であっても、地域調査の意義や効果を認識し、調査・研究の手法を生徒が獲得できたと考えていることがわかる。課題については、カリキュラムの運用上の問題であり、今後の改善が可能な内容といえる。

汎用的な地域学習への方策

本活動の地域学習の方法が、他の学校でも活用できる方策について2点述べる。

1) 地図の活用

地図は、地域によって差があるものの、約100年間にわたり日本全国において過去の地表に関する情報が得られる汎用性の高い資料である。また、その情報は、文字ではなくシンボライズされた情報であるため、情報を読み解く作業が必要である。すなわち、答えは地図の中にあるものの、その答えを導くためには生徒自身で探す必要があるといえる。これは授業において、生徒が能動的に答えを探究することに繋がる。

現在、地形図の入手は、国土地理院から購入する従来の方法だけでなく、地理院地図²⁾や今昔マップ³⁾、ひなたGIS⁴⁾などから、ウェブ上で容易に現在や過去の地形図を入手できる時代となり、授業準備にかかる手間が軽減されている。地図を用いた授業が容易にできる環境が現在整っているといえる。

地図作業のポイントとしては、あまり広い範囲を対象に作業をさせないようにすることが重要である。本研究では、色塗りの範囲を1.5km×1km(作業するA3サイズの地図上では10cm×6.7cm)とした。これは個人や担当する地図の情報量により違いがあるが、20~30分の作業にあたる。限られた範囲で、地域の変化が典型的にみられる範囲を設定する必要があり、そのためには事前に一度教員が作業を行い、土地利用の変化を見極めた後に、地図作業の範囲を設定する必要がある。一度地図を作っておくと、毎年使うことができる。

2) 学校周辺での地域調査

効率的な地域調査を行うためには、学校周辺で実施することが適当である。その利点として、①地域の歴史や現状に詳しい地元の方からの協力を得やすいこと、②生徒自身が暮らしている地域あるいは通学で通る地域なので、生徒自身にとってなじみがあること、③移動時間の短縮や移動中の事故のリスクが軽減されること、④調べる対象が、その地域の産業、暮らし、地形、土地利用、行政の現状やそれぞれの歴史的な変遷など無限にあり、毎年継続的に本授業を実施したとしても、新しいテーマを設定して生徒が学ぶことができること、が挙げられる。ただし、多くの場合、教員は学校周辺地域の歴史や地理に詳しいわけでない。しかし、地域の方に積極的に協力を求めることで、地域調査が実施できる可能性が広がる。また、市町村史などの文献資料や、パンフレット、地域に残されている石碑も有用である。

本研究での地域・学校・生徒の関係を模式的に整理した(図8)。図中の矢印は3者同士の関わりを示し、枠内の文章はそれぞれにとっての意義を示す。生徒にとっては、これまで考えていなかった視点で身近な地域を新たに捉え直すことになり、地域への理解・関心・愛着が生まれ、さらに探究心を育み、探究方法を習得する効果があると考えられる。地域にとっては、若い世代に地域のことを理解してもらえることが大きな意義であり、若

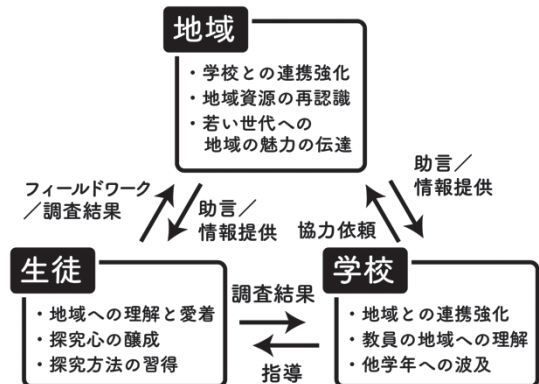


図8 本研究における地域調査に関わる生徒・学校・地域の関係
矢印は行為、枠内は地域調査における意義を示す。著者作成。

2) 地理院地図 web サイト <https://maps.gsi.go.jp> (2021/11/6 閲覧)

3) 今昔マップ web サイト <https://ktgis.net/kjmapw/> (2021/11/6 閲覧)

4) ひなた GIS web サイト <https://hgis.pref.miyazaki.lg.jp/hinata/hinata.html> (2021/11/6 閲覧)

い世代による地域資源の捉え方を認識できることにも繋がる。学校にとっても地域との連携をこの授業を通じて強化でき、さらに教員も、生徒が暮らす学校周辺の地域の現状や課題について理解が深まる意義などがある。さらに継続的に地域調査を行うことで、上級生の成果を見ながら下級生が調査の方法や調べ方、まとめ方も学ぶことができる。

終わりに

本稿では、2020年度の東広島市立志和中学校で実施した、「総合的な学習の時間」における地域調査について紹介した。具体的には、①地図作業、②全体フィールドワーク、③班内での議論、④班別フィールドワーク、⑤班内の整理・分析、⑥プレゼンテーション、⑦振り返りの順序で授業を進めており、地理教育で行われる地域調査の方法としては一般的なものである。しかし、「総合的な学習の時間」において実際に行うことで、本研究では改めてその意義を多面的に確認することができた。

折しも、高等学校地理歴史科では、2022年度から必修科目「地理総合」がはじまる。この科目では、地域調査の内容があり、すべての高校生が地域調査について学ぶことになる。先取り学習となる本授業を行うことで、スムーズに地域調査を理解することが可能となるだろう。

地域調査は、事前に準備をする大変さはあるものの、一度配布資料を用意したり、地域との協力関係が構築できれば、更新することは少ない。一方、生徒自身で主体的に学ぶことができることから得るものが多い活動ともいえる。地域の方に頼りつつその成果を地域に還元するといった地域調査の取り組みが、多くの中学校で広まることを期待し、本研究がその一助になれば幸いである。

付記

本研究にあたり、志和町在住の東広島郷土史研究会会員の吉本正就氏には、授業全般にわたり貴重な助言を頂くと共に、地域の方の紹介、郷土資料の提供をして頂きました。地域の皆様には、忙しい中、生徒からの聞き取りを快くお引き受けいただきました。また、「志和良いところPR実行委員会」（代表 松浦和子氏）には、本授業の取り組みに賛同していただき、本授業の活動をまとめた報告書の印刷費をご支援頂きました。以上の方々に、記して感謝申し上げます。

なお、本論文に掲載した、授業で用いた資料(図2～6)は、紙幅の関係で縮小している。志和中学校周辺の内容が多いものの、他の地域でも活用可能な内容を含む。利用を希望する方は筆頭著者(熊原)宛に連絡をいただければ、オリジナルファイルを提供します。

引用文献

- 井田仁康(2002):地理教育の観点から見た「総合的な学習の時間」.社会科教育研究, **87**, 11-20.
- 池 俊介(2012):教育における地域調査の現状と課題. E-journal GEO, **7-1**, 35-42.
- 篠原重則(2001):地理野外調査のすすめ—小・中・高・大学の実践をとおして. 古今書院.
- 吉田和義(2018):中学校社会科・高等学校地理歴史科における地域調査と地図の活用. 教育学論集, **70**, 137-149.
- 文部科学省(2017):中学校学習指導要領(平成29年告示)解説総合的な学習の時間編. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_012.pdf (2021/11/6閲覧).
- 横川知司・熊原康博編著(2020):西条地歴ウォーク. レタープレス社.